

開館50周年記念  
The 50<sup>th</sup> Year of the Sompo Museum of Art

# Marquet

アルベール・マルケ展  
Albert Marquet: A Retrospective

2026.9.22 tue. — 12.13 sun.  
SOMPO美術館



PRESS RELEASE

《ナポリ、帆船》1909年 油彩／カンヴァス 65×81cm ボルドー美術館 © Mairie de Bordeaux, Musée des Beaux-Arts, photo F. Deval



フランス南西部の港湾都市ボルドーで生まれたマルケは、パリで盟友アンリ・マティスと出会い、仲間たちとともに純粋色と自由な筆触を用いた「フォーヴィスム（野獣派）」と呼ばれる作風を展開していきます。しかし、終始、観察に基づいて描く態度を崩すことはなく、「マルケのグリ（灰色）」と呼ばれた独特な灰色の使い方をはじめ、ニュアンスに富んだ中間色のトーンの対比によって、風景画を描くようになります。

彼はパリの自宅から眺めたセーヌ、南仏やアルジェなど旅先で出会った水辺の情景を愛し、時間や天候を変えて同じ場所を繰り返し描きました。高所から俯瞰する角度で水辺と建物が織りなす風景を見つめ、それらを単純化した色面で構成し、風景の本質的な構造を浮き彫りにしたのです。また、人々や車、船といった都市生活のモチーフを軽やかに描き、そのわずかな筆致で真髄を捉える描写力には、日本美術の影響も指摘され、マティスから「我らの北斎」と称えられました。

本展は、日本におけるマルケの35年ぶりの回顧展です。初期から晩年に至る画風の変遷をたどるとともに、水辺の情景などいくつかの重要なモチーフやテーマに焦点を当てます。さらには晩年のポン＝ヌフ連作の特異な魅力を浮き彫りにします。作家ゆかりの重要なパブリックコレクション、日本の主要美術館、日仏の個人所蔵家から厳選された作品約90点が一堂に会します。

## 見どころ

### 1 国内では35年ぶりとなる本格的なマルケ展

国内では35年ぶりとなる本格的な個展です。本展では、マルケの最大コレクションを有するボルドー美術館をはじめ、アンドレ・マルロー近代美術館、プザンソン美術考古博物館など、フランスの公立美術館の協力を得て、初期から晩年までの様式の展開を体系的に紹介します。

### 2 「マティスの友人」を超えて——いま再発見されるマルケ

マルケは、マティスらとともにフォーヴィスムの誕生に関わった重要な画家でありながら、長くその陰に隠れた存在として語られてきました。しかし2016年にパリ市立近代美術館で開催された回顧展以降、フランスではその独自性への再評価が進んでいます。本展では、同展の担当キュレーターであるソフィ・クレップス氏を学術協力者に迎え、フォーヴィスムの問題系を生涯にわたり探究した画家として、マルケの新たな像を提示します。

### 3 水辺の情景に息づく、色と線の魅力

セーヌ、港、海辺の町——マルケは生涯を通じて水辺の風景を愛し、そこに都市の光、大気、人々の営みを描き出しました。抑制された色彩、明快な構図、そして簡潔でいきいきとした線は、マルケ芸術の大きな魅力です。本展では油彩に加え、約25点の素描類も展示し（会期中展示替えあり）、日常の身振りや都市の気配をとらえる、画家の卓越したデッサンの力にも注目します。

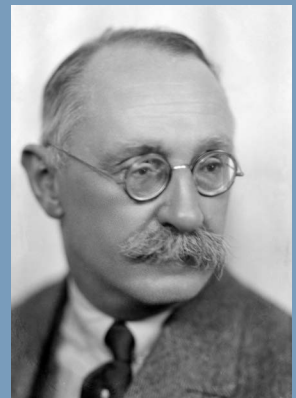
## 展示構成

- 1 形成期：フォーヴィスムの渦中で  
Formative Years: Amidst Fauvism
- 2 水辺の変奏：旅する画家  
Variations on Watersides: The Artist Traveller
- 3 アルジェに恋して  
Algiers
- 4 晩年：セーヌ、ポン＝ヌフ連作  
Late Years: La Seine and Pont-Neuf Series
- 5 素描、挿絵本  
Drawings and Illustrated Books

### アルベール・マルケ Albert Marquet (1875–1947)

ボルドーに生まれたマルケは、幼いころから絵の才能を示しました。その資質を見出した母に伴われてパリへ移住します。国立装飾美術学校で学び、1892年にアンリ・マティスと出会い、翌年には国立美術学校のギュスターヴ・モロー教室に入りました。そこでアンリ・マンガン、ジョルジュ・ルオー、シャルル・カモワンらと親交を結び、友人らと共に1905年のサロン・ドートンヌに出品した作品がフォーヴ（野獣）と呼ばれスキャンダルを巻き起こします。しかし、その抽象化へ深く進むことはなく、終始、対象の観察に根ざしたリアリズムの態度を保ち続けました。

早くから画廊で作品を発表したマルケは、南フランス、イタリア、マグレブ諸国など各地を旅しながら制作を続けました。地中海の明るい光と、セーヌ河岸に漂う銀灰色の空気とのあいだを往還しながら、独自の色彩感覚を育てていきます。フォーヴ期に獲得した、色面を使った簡潔な造形を基盤に、灰色や黒の繊細なニュアンスを生かした画面を展開し、港町や河岸、都市の水辺を主題とする風景画によって、20世紀フランス絵画のなかで独自の位置を占めました。



広報用画像1

© Henri Martinie / Roger-Viollet

# 1 形成期：フォーヴィスムの渦中で Formative Years: Amidst Fauvism

1898年から1906年にかけてのマルケは、フォーヴィスムの潮流に身を置きながらも、純粹色の実験や様式的な革新に回収されない独自の表現を築きました。ギュスターヴ・モローの教室でマティスらと学んだ彼は、視覚的観察に根ざしたリアリズムを保ちつつ、アカデミー、パステル画、パリの街路やセーヌ河岸、港湾都市の風景を通じて、線と色価による画面構成を探究します。幾何学的遠近法に頼らず、河岸や道路の線、建物や人物のシルエットを生かして、奥行きと推進力を備えた空間を構築。抑制された灰色や青の階調、湿潤な大気、簡潔で自由な描線によって、都市と水辺に息づく時間、運動、生活の感覚を鮮やかに描き出しました。

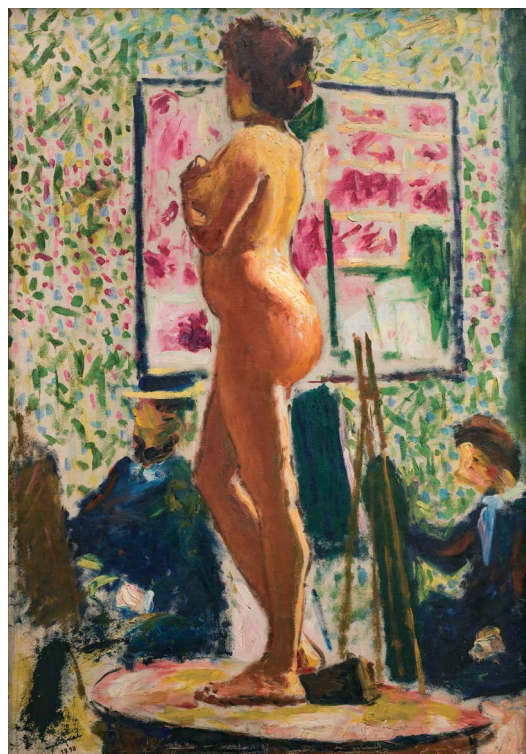
## 広報用画像2

### アルベール・マルケ《裸婦、通称フォーヴの裸婦》

1898年 油彩／カンヴァスに貼った紙 73×50cm ボルドー美術館

© Mairie de Bordeaux, Musée des Beaux-Arts, photo F. Deval

モロー教室を去る少し前、マルケはマティスと競い合うように本作を制作したとされています。ほぼ同一の構図をもつマティスの《画室の裸婦》と対をなす作品です。円形の台座に立つ黄金色の裸婦は、右から差し込む光によって背中や手足の輪郭を繊細に浮かび上がらせています。一方、背景には緑、青、赤などの鮮烈な色彩が短い筆触や点描で置かれ、伝統的な裸体画の枠組みの中に、新印象派を自由に解釈した実験的な表現が導入されています。略描された画学生たちや圧縮された空間構成もまた、若き画家たちが新しい絵画様式を模索していたことを示しています。



## 広報用画像3

### アルベール・マルケ《ル・アーヴル、船渠》

1906年 油彩／カンヴァス 61×50cm

ル・アーヴル、アンドレ・マルロー近代美術館

© MuMa Le Havre / Charles Maslard



1906年6月、マルケはラウル・デュフィとともにル・アーヴルを訪れ、近代美術サークルの展覧会を契機に同地で18点の絵画を制作しました。そのうちの1点にあたる本作では、港湾都市における水域と都市空間の関係が、簡潔な構成によってとらえられています。停泊する船、岸壁、背後の建築物は整理された形態として配置され、細部の描写は抑えられています。灰色や褐色を基調とする落ち着いた色調のなかで、水面の反映や色面の構成には、フォーヴ期の経験の痕跡がうかがえます。マルケは港の活気を直接描くのではなく、距離を保った視線から、都市と水がつくる秩序ある空間を表しています。

## 2 水辺の変奏：旅する画家

### Variations on Watersides: The Artist Traveller

マルケは生涯にわたり国内外を旅して制作しましたが、その多くは河川や海、港などの水辺でした。パリではセーヌ河沿いに暮らし、ノルマンディーや南仏の海岸、ヨーロッパ各地の港町、北アフリカやナイル河沿いなど、制作地は広範に及びます。描く場所に応じて、画面はパリの単色調の都市風景、イル＝ド＝フランスの緑豊かな川辺、ハンブルクやロッテルダムに見られる灰褐色の北方の港など、多様に変奏されています。一方で、海の向こうに対岸や突堤、山並みを配し、広がりゆく空間を一定の構造のうちに収める構成には、マルケの一貫した姿勢が認められます。彼は雄大な自然や無限の広がりを描くよりも、自らの視覚と感覚でとらえうる風景の秩序を重んじました。旅の画家であると同時に、観察に根ざしたリアリストであり続けたのです。



広報用画像4

アルベール・マルケ

《パリのノートル＝ダム大聖堂、積雪》

1916年 油彩／カンヴァス

81×64.8cm パリ、個人蔵

Courtesy Galerie de la Présidence

1908年1月、マルケはサン＝ミシェル河岸19番地の6階にアトリエを構えました。セーヌ河に面した窓からは、右にノートル＝ダム大聖堂、左にサン＝ミシェル橋を望むことができ、このふたつの風景は以後、繰り返し描かれる主要な主題となりました。直前まで同じ部屋に住んでいたマティスもまた、これらの眺めを描いており、マルケはその試みをよく知っていたと考えられます。しかし、色彩や形態の大胆な実験を進めたマティスに対し、マルケは堅固な構図を保ちつつ、抑制された色調と簡潔な描法によって、曇天、雪、洪水などにより変化するパリの街の表情をとらえました。窓からの視線は、都市と水辺、大気の移ろいを観察するための重要な装置となったのです。

## 広報用画像5

### アルベール・マルケ 《ナポリ、帆船》

1909年 油彩／カンヴァス  
65×81cm ボルドー美術館  
© Mairie de Bordeaux, Musée des  
Beaux-Arts, photo F. Deval



1908年と翌年の二度のナポリ滞在において、マルケはヴェスヴィオ山を望む独特の海景画を生み出しました。初回はマンガンのイタリア旅行に同行しましたが、のちにひとり残って制作し、この景観への関心から翌年にも再訪したと考えられます。最初の滞在で描かれた作品では、停泊するヨットやポート、突堤が画面を構成していますが、本作が描かれた二度目の滞在では構図はいっそう単純化されます。前景から陸地や船が取り除かれ、水面が画面下端まで広がり、釣り舟と遠景の船、そしてヴェスヴィオ山のシルエットによって空間が構成されています。形態と色彩を極限まで簡素化したこの海景は、日本美術、とりわけ北斎の風景表現との共通性を指摘されることも多く、マルケの表現が到達した静謐で明晰な構成美を示しています。

## 広報用画像6

### アルベール・マルケ 《マルセイユの馬》

1916年 油彩／カンヴァス 65.5×81cm ボルドー美術館  
© Mairie de Bordeaux, Musée des Beaux-Arts, photo F. Deval



マルケは、早い時期からたびたび南仏で制作しましたが、とくにマルセイユでの長期滞在は第一次世界大戦に関係しています。パリの不穏な状況を避けるべく、強く勧めるマティスに同行して1915年冬から翌年にかけて逗留したのをきっかけに、以後、戦争終結まで毎年、半年近くをこの港町で過ごすこととなります。滞在中、港や街で人々の営みをスケッチしたことや地元住民との交流をマルセル・マルケは記していますが、油彩に多く描かれたのはやはり港の光景でした。港の北岸から描いた作品では、対岸の小高い丘の上にノートルダム・ド・ラ・ガルド寺院のシルエットを望むことができます。

# 3 アルジェに恋して Algiers

1920年以降、マルケは北アフリカのフランス領アルジェリアをたびたび訪れ、透き通る光に満ちた風景を数多く描きました。最初の滞在は、長引くインフルエンザの転地療養を勧められたことが契機であり、現地でガイドを務めたマルセルは後に夫人となります。春のような陽光、海岸線、港を出入りする船、古代の面影と近代都市が重なる街並みは、マルケにとって重要な画題となりました。夫妻は各地を旅しましたが、アルジェリアは毎年のように滞在した特別な場所であり、後半生の本拠地の一つでもありました。1940年以降は戦争の時代も同地で過ごし、港に停泊する軍艦など、時勢の緊張も画面に現れます。アルジェリア風景は、マルケの表現の変化と、彼が見つめた時代の移ろいを伝えています。



かつて商船で賑わったアルジェの港は、第二次世界大戦下で次第に軍港としての性格を強めていきました。1942年11月8日、アメリカ艦隊がアルジェリアに上陸した「トーチ作戦」を機に、同地は連合国艦隊の重要な拠点となります。マルケと夫人マルセルはこの上陸を歓迎し、マルケは港に停泊する艦隊を主題として描きました。港のアパルトマンが軍に接收されたため、彼はホテルの窓から港湾風景を制作することになります。再び自宅の窓からアガ港を望むことができたのは、連合軍がアルジェから撤退した1944年以降でした。戦時下の港を描いたこれらの作品には、マルケが見つめた時代の緊張と、変貌する都市の姿が刻まれています。

## 広報用画像7

### アルベール・マルケ 《アルジェの連合艦隊》

1942年 油彩／カンヴァス 65×81cm ボルドー美術館  
© Mairie de Bordeaux, Musée des Beaux-Arts, photo F. Deval

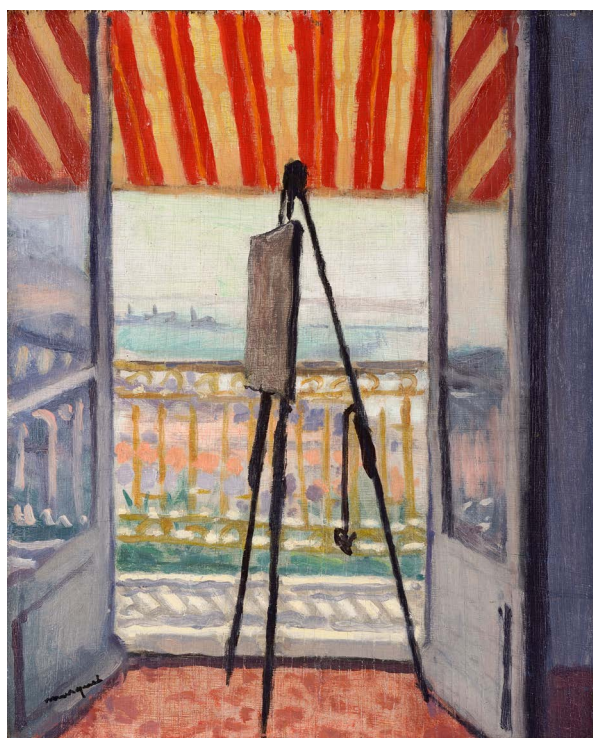
## 広報用画像8

### アルベール・マルケ

#### 《バルコニー、または縞模様の日よけ》

1945年頃 油彩／板 27×22cm パリ、個人蔵  
Courtesy Galerie de la Présidence

マルケがアルジェで構えたアトリエや住居の窓からは、いずれも海を望むことができました。本作は港から少し離れた高台からの眺めであり、ジュナン・シディ・サイドの部屋を描いたものと考えられます。「開かれた窓」は、内と外を結ぶ絵画上の装置として多くの画家に用いられてきましたが、マルケの作品では空間は断片化されず、窓そのものが重要なモチーフとして描かれています。グレーに縁取られたガラス窓と、カンヴァスを載せたイーゼルは、室内と陽光に満ちた屋外を静かにつないでいます。淡く遠い海と船影は、アルジェでの生活の記憶を穏やかに伝えています。



## 4 晩年：セーヌ、ポン＝ヌフ連作

### Late Years: La Seine and Pont-Neuf Series

マルケは終生セーヌを愛し、その流れを繰り返し描き続けました。1931年にはシテ島とポン＝ヌフを望むセーヌ左岸のアパルトマンに移り、そこを終の棲家としました。パリのアトリエでは、天候や時刻を変えながら、セーヌの眺めを定点観測のように描きました。曇天、霧、雪に包まれたポン＝ヌフの連作では、灰色、青緑、淡褐色を基調とする抑制された色調が、柔らかな光に満ちた静謐な都市空間をつくり出しています。一方で、高所からの視点と明快な構図、橋上を行き交う人や車の簡潔な描写は、都市に息づく生活の気配を伝えています。晩年、病に倒れたマルケは、アトリエから見たセーヌの雪景色にうながされるかのようにして、最後の連作に取り組みました。セーヌは彼にとって、制作の原点であり、最期まで見つめ続けた風景でした。



広報用画像9

アルベール・マルケ  
《ポン＝ヌフとサマリテーヌ》

1940年 油彩／カンヴァス 65×81cm

ひろしま美術館

1931年8月末、マルケはサン＝ミシェル河岸のアトリエを離れ、ドフィーヌ通り1番地のアパルトマンに転居し、ここを終の棲家としました。6階の窓からは、彼が愛したセーヌ河、ポン＝ヌフ、シテ島の先端、対岸のサマリテーヌ百貨店を一望することができ、マルケはこの眺めを「パリで一番」と称えました。以後、旅先から戻るときに、昼夜を問わずこの風景を描き続けました。昼の作品では、灰色や緑灰色を基調とする抑制された色調によって、冬の曇天に包まれたパリが静かに表されています。斜めに画面を横切るポン＝ヌフ、橋を行き交う人々や車は、わずかな筆致でありながら都市の動きを的確に伝えています。

広報用画像10

アルベール・マルケ 《ポン＝ヌフとサマリテーヌ》

1935年頃 油彩／カンヴァス 65×81.5cm 個人蔵





#### 広報用画像11

### アルベール・マルケ 《ラ・フレットへの道》

1945年 油彩／カンヴァス 65×81cm ボルドー美術館

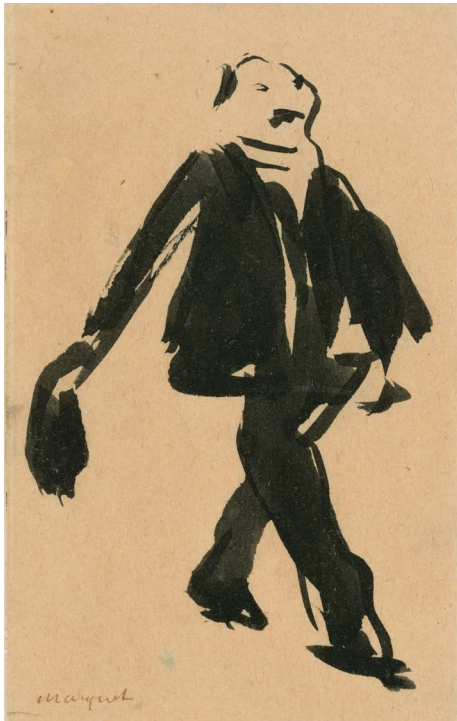
© Mairie de Bordeaux, Musée des Beaux-Arts, photo F. Deval

1939年以降、マルケはパリ北西部のセーヌ河沿いの村ラ・フレットに滞在するようになりました。戦時中はアルジェに避難しましたが、戦後パリに戻ると、亡くなるまでの2年間をパリとラ・フレットを行き来して過ごしました。マルセルによれば、ラ・フレットはマルケにとって最も居心地のよい場所であり、制作に集中できる静かな環境でした。屋根裏部屋のアトリエからはセーヌ河を一望でき、マルケは俯瞰する視点から、河の対角線と対岸の水平線によって構成される風景を繰り返し描きました。本作では、明るい日差しのなかを歩く人々や、セーヌを行く曳舟が、穏やかな日常の気配を伝えています。生活の営みを感じさせるこうしたモチーフは、マルケの風景に欠かせない要素でした。1947年、マルケはこの風景を望むラ・フレットの墓地に埋葬されました。

# 5 素描、挿絵本

## Drawings and Illustrated Books

マルケにとって素描は、終生重要な表現手段でした。美術学校で伝統的なアカデミー素描を学んだ後、彼の線は早くも独自の性格を帯びます。インクや墨を用い、パリの街やそこに生きる人々の一瞬の姿を、極限まで削ぎ落とした太い描線とらえたのです。その流麗な線は、しばしば東洋の書や北斎の表現に比較され、風景においては光や空気の動きを、人物においてはしぐさや性格までも暗示的に表しています。1920年頃から描線はより繊細になりますが、最小限の線で対象の本質をとらえる姿勢は変わりません。マティスが北斎との類縁を語ったように、マルケの素描には、鋭い観察と簡潔な表現が結びついた独自の魅力が示されています。



広報用画像12

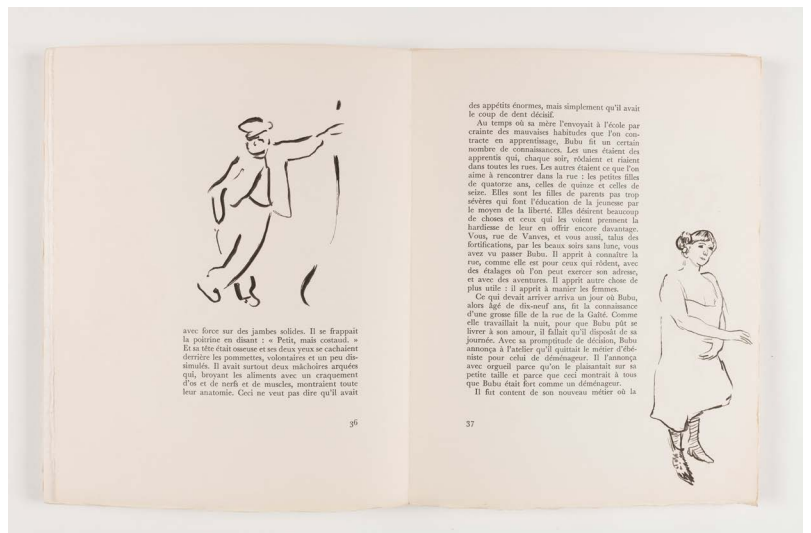
### アルベール・マルケ《幸福な男》

1904年 墨・筆／厚紙に貼った紙 15×9cm ポルドー美術館

©Mairie de Bordeaux, Musée des Beaux-Arts, photo F. Deval

※前期のみ展示

小説家シャルル＝ルイ・フィリップの『ビュビュ・ド・モンパルナス』は、優しい娼婦ベルト、そのヒモであるモーリス、ベルトに惹かれる製図工ピエールをめぐる物語です。マルケは生前、この小説の挿絵制作を依頼され、パリの下層社会に生きる人々の日常やしぐさを、感傷や美化を交えずに描きました。しかし出版社の承諾を得られず、挿絵入りの本が刊行されたのはマルケ没後の1958年でした。シャルル＝ルイ・フィリップは、マルケの作品には「悪徳の匂い」と「物事の重み」があり、それを軽やかな大胆さが支えていると評しました。都市の現実を鋭く見つめるマルケの素描は、若き日の彼の観察力と表現の独自性を伝えています。



広報用画像13

### シャルル＝ルイ・フィリップ著、アルベール・マルケ挿画 『ビュビュ・ド・モンパルナス』

C・クレ&A・フォール社刊 1903年頃制作／1958年刊 版画による挿絵本  
24.5×19.5 cm ポルドー美術館

© Mairie de Bordeaux, Musée des Beaux-Arts, photo F. Deval



[広報用画像14](#)

アルベール・マルケ、パリ、ドーフィーヌ通り1番地の自宅バルコニーにて、1945年

© Centre Pompidou, MNAM-CCI, Bibliothèque Kandinsky, Dist. GrandPalaisRmn / Fonds Marc Vaux / distributed by AMF

## 会期中のイベント

### ギャラリー★で★トーク・アート〈要申込〉

11月30日(月) 14:00-16:00

休館日に貸し切りの美術館で、ボランティアガイドと話しをしてみませんか？  
作品解説を聞くのではなく、参加者が作品を見て、感じて、思うことを話し  
ながら楽しむ参加型の作品鑑賞会です。

定員 50名(先着順)

参加方法 web申込、9月25日(金) 10:00より美術館ホームページにて  
受付開始

参加費 2,000円(税込)

※高校生以下無料

※ご招待券、ご招待状、年間パスポート、割引等は適用できません

詳細は美術館ホームページをご覧ください

その他のイベントを開催する場合はホームページで詳細をご案内します

## 収蔵品コーナー

フィンセント・ファン・ゴッホ《ひまわり》、ほか

### 音声ガイド 増田俊樹さん [声優]

増田さんが、  
ときにマルケに扮して、  
マルケ作品の見どころを、  
その生涯とともに  
ご案内します。

ご利用料金  
1台700円(税込)  
※アプリ配信はありません



**Profile** 3月8日生まれ。広島県出身。主な出演作品はアニメ「忘却バッテリー」清峰葉流火役、「僕のヒーローアカデミア」切島鋭児郎役、「ハイキュー!!」縁下力役、「刀剣乱舞」シリーズ 加州清光役、「アイドルリッシュセブン」和泉一織役など。また、「イカゲーム」シーズン2 サノス役、「ミズ・マーベル」カムラン役、「エクスペンダブルズ ニューブラッド」ガラン役などの日本語吹替も担当している。

## 開館50周年記念 アルベール・マルケ展

The 50<sup>th</sup> Year of the Sompo Museum of Art

Albert Marquet: A Restrospective

会期 2026年9月22日(火) - 12月13日(日)

会期中、素描類の展示替えを行います。前期：11月1日(日)まで、後期：11月3日(火・祝)から

会場 SOMPO美術館 〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1

休館日 月曜日(ただし10月12日、11月23日は開館)、9月24日、10月13日、11月24日

開館時間 10:00-18:00(金曜日は20:00まで) ※最終入場は閉館30分前まで

観覧料 一般(26歳以上) 事前購入券1,800円 当日券2,000円

(税込) 25歳以下 事前購入券1,100円 当日券1,200円

高校生以下無料

- ・身体障がい者手帳・療育手帳・精神障がい者保健福祉手帳(ミライロIDも可)をご提示のご本人とその介助者1名は無料、被爆者健康手帳をご提示の方はご本人のみ無料
- ・年齢は入場時点、25歳以下の方は入場時に生年月日が確認できるものをご提示ください
- ・事前購入券は8月21日(金)10:00から販売開始、公式電子チケット「アソビュー!」、イープラス、ローソンチケット(Lコード:35711)、チケットぴあ(Pコード:687-486)などでお買い求めいただけます
- ・事前購入券は手数料がかかる場合があります
- ・購入方法の詳細は美術館ホームページをご確認ください

主催 SOMPO美術館、東京新聞、共同通信社

特別協賛 SOMPOホールディングス

協賛 DNP大日本印刷

特別協力 ポルドー美術館、損保ジャパン

協力 日本航空、ヤマト運輸

後援 在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ、新宿区

## SOMPO美術館

URL <https://www.sompo-museum.org/>

お問合せ 050-5541-8600 (ハローダイヤル)

アクセス 新宿駅西口より徒歩5分



### プレスお問合せ

「アルベール・マルケ展」広報事務局(共同PR内)

担当：三井

e-mail. [marquet-sompo-pr@kyodo-pr.co.jp](mailto:marquet-sompo-pr@kyodo-pr.co.jp)

TEL. 03-6264-2382

〒104-0045 東京都中央区築地1-13-1

銀座松竹スクエア10階